様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月３１日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：21792333
研究課題名（和文）
精神障害をもつ人への地域医療・福祉のチームアプローチに関する家族ケア研究
研究課題名（英文）
Family Support in Assertive Community Treatment with People with Psychiatric Disabilities
研究代表者
岡本　亜紀（OKAMOTO　AKI）
岡山大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：10413527

研究成果の概要（和文）：包括型地域生活支援プログラムを利用する精神障害のある人の家族、8事例にインタビューを実施することができた。インタビュー内容からは、支援者とともに精神障害のある本人の地域生活が安定するよう協働している家族の思いを知ることができた。治療早期から適切な家族支援を実施するためには、家族の思いを知ることが重要である。

研究成果の概要（英文）：I conducted individual interviews with 8 families who have a family member with psychiatric disability and use Assertive Community Treatment. I made it clear that how each family is working for well-being of the disabled family member in daily life. It is inevitable to understand families' thoughts and needs in order to support them properly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学　地域・老年看護学
キーワード：包括型地域生活支援プログラム、家族、精神障害

１．研究開始当初の背景
(1) 包括型地域生活支援プログラム

平成18年の障害者自立支援法成立により、各自治体では精神障害のある人を対象とする

地域生活支援事業が開始されている。この事業方法のひとつに米国で開発された包括型地域生活支援プログラム（Assertive Community Treatment：ACT）、通称アクトがある。アクトでは、医師・看護師・作業療法士・精神保健福祉士などが多職種チームを編成し、精神障害のある人がその人らしく自己実現を目指すために必要な支援の計画から支援の提供まで、自宅を訪問して直接的にかかわる。この方法により重度精神障害のある人でも入院することなく医療・福祉支援が受けられるため、社会的入院の解消にも期待されており、全国普及が模索されているところである。

(2)家族の負担と家族支援

精神障害のある人が地域で生活するためには家族の協力が重要であるが、家族は、治療中断への心配、病気が悪化したときの対応、社会の偏見、本人の世話により様々な介護負担を抱えており、本人の退院や地域生活には否定的なことが多い。

(3) アクトによる家族への影響

アクトにおける家族支援の内容や家族への影響は明らかにされていない。研究者の先行研究では、家族の非効果的なストレス対処行動と批判的態度の関連を検証した結果、家族の行動変容を目的とした個別的支援の重要性が明らかになった。そこで本研究では、多職種で構成されたアクトチームのかかわりが家族支援として家族の思いや態度にどのような影響を及ぼすのか、その変化のプロセスに着目した。

２．研究の目的

(1)アクトの家族支援において、どのようなかかわりがなされているのかを明らかにする。

(2)アクトを利用する精神障害のある人の家族へインタビューすることで、家族の思いを明らかにする。

３．研究の方法

(1)調査参加者と調査期間

①アクトを利用した経験のある精神障害のある人の家族、および家族にかかわったアクト支援者とした。

②調査期間は、2009年10月～2011年3月であった。

(2)調査方法

①データ収集は半構造化インタビュー法を用いた。

②インタビュー内容は、本人の最近の様子や家族自身の気持ちについて自由に語ってもらい、ＩＣレコーダーに録音した内容を逐語録として文章化しデータに用いた。

③分析は質的記述的分析とした。先ず、本人の状態は「良い」と語られた事例について、家族の思いや態度の変化について語られた部分を抽出しコード化、さらにそれぞれのコードをデータに立ち返りながら類似性に基づいて比較分類した。

④カテゴリー化は研究者間の合意が得られるまで繰り返し行う。さらに、分析に際して、家族にかかわったアクト支援者の作業療法士1人、精神保健福祉士4人、看護師2人にも意見を求めた。

⑤倫理的配慮は、研究者が所属する倫理審査委員会の承認を得た後、データ収集に際しては、研究協力機関から本人と家族への事前説明の後、参加意思のある家族に対して研究者が調査目的と方法、個人情報保護の遵守などについて説明し同意書を得て実施した。

４．研究成果

(1)参加者の基本属性

①精神障害のある本人の家族33事例のうち、8事例から同意が得られ、インタビューを実施することができた。

参加者	続柄(年齢)	本人(年齢/病名)	世帯
A	母親(80代)	息子(60代/統合失調症)	同居
B	両親(80代)	娘(50代/統合失調症)	同居
C	娘(30代)	母親(60代/統合失調症)	別居
D	妹(60代)	姉(60代/双極性障害)	別居
E	母親(90代)	娘(60代/双極性障害)	同居
F	叔母(70代)	姪(40代/統合失調症)	別居
G	父親(80代)	娘(50代/統合失調症)	同居
H	母親(50代)	娘(20代/統合失調症)	同居

(2)質的記述的分析による家族の思いの内容

インタビューから、本人の状態を良いと感じている家族の思いを質的記述的に分析した結果、家族は、アクト支援者とともに本人の地域生活が安定するように協働していた。[自分のことだけを思っていた］家族は、［アクトに出会って変われた］ことから、［精神の病気のつらさに共感する］ようになった。さらに、［病気が回復に向かっている］、［本人の心の中を思う］気持ちが循環する中で、［自分たちのこれからの人生を考える］ように変化することが分析された。以下にサブカテゴリーの代表例を記述する。([] はカテゴリー)

①自分のことだけを思っていた

何もわからないから怖かった

病気が恥ずかしかった

どんな風に扱ってよいか見当もつかずもう限界だった

しなくてはならないことが多くて大変な苦労だった

②アクトに出会って変われた

別の先生に来てもらったり訪問看護頼んだり何人も代わって困ったけど、アクトにしてもらって全部良いようにしてくれた

本人の退院をきっかけに、本人の話をしっかり聴いてくれる人、納得するまで待ってくれる人、本人のために来てくれる人に出会えて自分の気持ちが変われた

③精神の病気のつらさに共感する

病気と思わなかった

病気の原因を考えるとかわいそう

医者に診せたことで改めて病気のつらさを思う

薬や注射を受け入れてくれている

④病気が回復に向かっている

人との付き合いができるようになった

ここ一年、家で落ち着いた暮らしができている

⑤本人の心の中を思う

自分が大人になって人の一生について考えた

本人の言葉を聞いて本人の心の中に気づいた

本人のことがわかるから本人の望むことをしようと思う

⑥自分たちのこれからの人生を思う

本人のために他の自分の家族を犠牲にはできない

これから先の自分と本人を思う

(4)家族支援モデル構築への提言

①家族の思いを知る

わが国の入院医療は、病気の回復が優先される閉鎖的な環境であり、また、本人が家族と協働していくことは困難である。急性期医療に従事する医師、看護師は、本研究結果の家族の思いを知ることで、治療早期から家族支援が必要であることを理解することが可能となる。

②アクト実践の「リカバリー」概念を精神科看護実践へ適用する

アクトでは、精神の病気により喪失した自己の再獲得、人生の回復という「リカバリー」の概念が用いられている。「リカバリー」概念には精神障害のある人と他者との協働関係が重要である。一方、入院中の治療環境では他者と関係を築くことが少なく、「リカバリー」を阻害しうる要因であると指摘されている。しかし、入院中でも本人と家族との協働関係を構築することは可能であり、「リカバリー」を促進させる重要な家族支援であると考える。

③入院早期からの家族協働支援プログラムの作成

入院医療における「リカバリー」促進方法のひとつとして、本研究結果を用いた家族協働支援プログラムを作成した介入研究を今後の課題とする。そのためには先ず、入院医療に従事する専門職は、本研究により得られた家族の思いを知ることが不可欠であろう。

④研究の限界

本研究結果はアクトを経験した精神障害のある人の家族の母集団が少ないことによる偏りがある。今後は調査範囲を拡大させ、信頼性および妥当性の確保に努める。

５．主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

① 岡本亜紀、長江弘子、精神障害のある人への家族の思いとＡＣＴ支援、第30回日本看護科学学会学術集会、2010年12月3-4日、札幌コンベンションセンター

６．研究組織

(1)研究代表者

岡本　亜紀（OKAMOTO　AKI）

岡山大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号：10413527

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし